

日本人はトンボをどのように見てきたか?

日本人の自然観の実証的研究

How do the Japanese see dragonflies?

A study on the Japanese view of nature

上田 哲行

Tetsuyuki UÉDA

石川県農業短期大学

Ishikawa Agricultural College

The Japanese regard dragonflies as a holy insect. Dragonflies symbolize good harvests, victory, happiness and even Japanese themselves. The ancient Japanese called their country Akitu, an old name for dragonflies. Such a way of seeing dragonflies by the Japanese may be strongly associated with their key industry, rice farming. Rice farming has provided many types of favorite habitats for dragonflies around the villages of Japanese people: paddy fields, irrigation ponds, irrigation streams and so on. Thus many dragonflies, especially the red dragonfly *Sympetrum frequens*, colonized there and became the most familiar insects for Japanese people. It is also important that most Japanese people have traditionally believed in a kind of simple animism in which many gods or spirits live with them, taking the form of various animals, plants, rocks and so on. The modern Japanese people have different, but not harmonized, views of nature derived from different cultures. Therefore the Japanese sometimes may act against nature in conflicting ways.

1. 研究目的

環境問題が深刻化する中、自然と対立する西欧的自然観に代わり自然と共存する東洋的自然観が注目を集めている。では、その東洋に位置する日本人の自然観とはどのようなものだろうか。花鳥風月を愛で、虫の音を楽しむなど、日本人は自然と一体となった生活を営んできたとの印象がある。しかしその一方で、日本人の自然の捉え方は非常に観念的であり、真の自然を知らないとの指摘もある。たとえば、日本人になじみの深いタヌキを例に取れば、私たちにとってのタヌキは民話や文学に出てくる狸であり、生物としてのタヌキについてはほとんど無知である。このような、いささか矛盾した日本人の自然観を改めて根本から再検討することは、自然破壊が深刻化し、緊急に自然と人間の共生の道をさぐることが求められている現在、きわめて重要と考えられる。

この研究は、トンボを中心とした虫に対する見方を通して、日本人の自然観の成立と変遷やその重層構造を明らかにすることを目的として行った。主要なテーマは以下の通りである。(1) 自然現象が自然観の成立に及ぼす影響の実証的研究、(2) 日本人の伝統的自然観の成立と大陸文化の影響、(3) 近現代日本人の自然観とその重層構造の解明。

2. 研究経過

2.1 研究会議

第1回研究会議は1999年6月に京都で行った。メンバー各人のテーマ、分担を確認し、意見を交換した。第2回研究会議は2001年1月に金沢で行った。第3回研究会議は2002年1月に、国立台湾大学名誉教授朱耀沂氏(昆虫学)を招聘し京都で行った。これらの研究会議で発表された報告の一部を添付する。研究の性格上、研究

会議での発表と討論が共同研究の場であったが、それは互いを啓発し非常に有意義なものであった。それぞれの報告に研究会議での討論が強く反映されていることをあえて付記しておく。

2.2 アンケート調査

当初、方言調査を行う目的でアンケート調査を企画した。しかし、研究会議での討論から禁忌伝承や赤とんぼに対するイメージなど大幅に質問内容を充実させることとなり、最終的にそれらも盛り込んで18の質問からなるアンケートを行った。全国から3000の小学校を任意に抽出し、その小学校長宛に郵送した。その結果、1026通の回答があった。回答者の大半は40~50歳代で、男女の比率は約8:2であった。

2.3 韓国調査

日本のアキアカネと韓国のタイリクアキアカネの分類学的位置づけを明らかにするために、韓国各地でタイリクアキアカネの採集を行うこと、その生活史の概要を明らかにすること、韓国民のトンボに対する見方を知ることが目的に上田と東は4回の韓国調査を行った。

3. 研究成果

3.1 日本におけるトンボの象徴性の歴史的変遷

多数の銅鐸にトンボが描かれていることや秋津というトンボの古名から弥生時代のアニミズム的世界の中でトンボは「豊穡のシンボル」として崇められていたと考えられる。後の古事記や日本書紀における国名「秋津島」命名故事もそれを示すものであろう。このように国名となるほど古代の日本人にとってトンボは「特別な虫」であった。

律令体制が確立する頃から蜻蛉は秋津ではなく「かけろふ」と読むようになり「はかなさのシンボル」となる。

この転換は遣唐使や遣唐使を通して輸入された大陸文化の影響と考えられる。鎌倉以降の武士社会にあつては「勝ち虫」と呼ばれ「幸運・勝利のシンボル」として武具などの装飾に使われるようになる。なぜ勝ち虫となったのかについては、記紀における雄略天皇の故事に由来するとされているようだが説得力はない。明治に入り欧化主義の反動から国粋主義が台頭すると、トンボは「日本人・日本のシンボル」として復活する。雑誌「日本人」の表紙をトンボが飾り続けたことなどからそれがうかがえる。以上は、いわば知識人や支配階級による「観念的自然観」に基づくトンボの見方といえる。

これとは別に、直接トンボと触れ合ってきた一般庶民（主に農民）の間には「体感的自然観」とでもいうべき見方が存在したと考えられる。その自然観は、仏教など伝来文化の影響を受けながらも素朴なアニミズム的（古神道的）信仰が色濃く残るものであり、虫送りや虫塚に示されるような怨霊や精霊が登場する自然観を形成してきた[22]。このような見方とともに、無心な子供の遊びの中のトンボも存在し、生き生きとしたとんぼ釣りの囃し歌や方言として伝承されている[17, 18]。さらに言えば、その子供の世界のトンボと大人の世界のトンボを結びつける形でトンボ採取の禁忌も伝承されてきたのであろう[20]。江戸末期に突如として出現する「虫漬け文化」[15]のエネルギーもこの流れの中にあるのだろうか。それは後にヨーロッパに渡りアール・ヌーヴォーを産み出すが、虫と共感する「体感的自然観」までは伝わらなかったようである[16]。

現代に生きる我々は、このような2つの自然観を受け継いでいることは確かである。さらに明治期以降に学校教育やマスメディアを通じて流入してきた西欧的自然観も我々に多大な影響を及ぼしている。しかも我々は、それらを必ずしも自家薬籠中のものとして融合させているとはいえず、矛盾を抱えたまま単に重層的に併せ持っているにすぎないのではないか。自然を愛する日本人は同時に「日本ほど自然を破壊している国はない」と西欧から指摘される民族でもある。

3.2 自然現象が自然観の成立に及ぼす影響

このテーマではトンボの在り方が禁忌伝承に及ぼした影響[20]、ウスバキトンボの分布とアカトンボとの混乱度合いの関係[19, 21]、クモ合戦文化の広がりやクモの分布との対応関係[23]などが論じられた。ここでは「豊穡のシンボル」としてのトンボの成立をアキアカネの生態との関連で検討した結果を報告する。

アキアカネは日本でもっとも普通に見られるトンボであり、一般に「赤とんぼ」といえばこの種を指す。旧北区に広く分布するタイリクアキアカネが氷河期に日本列島に入り、その後の温暖化によって大陸から隔離され、高地への移動習性を獲得してアキアカネになったとされている[1]。秋に田んぼに産み付けられた卵はそのまま冬を越し翌春にふ化する。田んぼに水がある間に幼虫は急速に成長し初夏の羽化に至る。その後すぐ標高1000m程度の高地へ移動して夏を過ごす。この間卵巣の発育は抑えられている。秋に再び平地に戻り繁殖活動を行う。秋

まで繁殖期を遅らせるのは卵越冬を基本とした生活環を維持するためと考えられる[7]。この仮説は今回も含めたこれまでの研究で確かめることができた。

アキアカネは小さな卵を数多く産む、いわゆる小卵多産型のトンボであり、もともとは河川の氾濫原など不安定で一時的な水域を利用して細々と生きていたと思われる。小卵多産型の動物は条件さえよければ爆発的に個体数を増加させる能力がある。人為管理された水田を利用することで、アキアカネは通常では考えられないほどの数の多いトンボになったと考えられる[8]。

日本列島に適応し、水田を利用することでアキアカネは「収穫の秋に突然どこからともなく大量に水田に現れる」という「豊穡のシンボル」に相応しい生活史を獲得してきた。収穫後の水田にまるで翌年の収穫のための種まきのように雌雄2匹連なって腹部を泥に打ち付けながら産卵するという習性もまたそれに相応しいものであろう。近縁のナツアカネはたわわに実った稲穂の上をまるで「御祓い」をするかのごとく上下しながら産卵する。まさにアカトンボは「田の神」であり、古代日本は秋津が豊作を言祝ぐ国であった。国号「秋津島」もこのような中から自然に発想されたと思われるのである[8]。

このアカトンボを仲立ちとしてトンボ全体が日本人にとって「特別な虫」になったのだろう。大量に水を必要とする水田稲作を基盤産業としたことで、水田、ため池、用水路、涵養林（里山）を構成要素とする典型的な日本の農村風景が各地に作られ、それは数多くのトンボに生息場所を提供すると同時に、トンボを身近な生きものとしたのである[9]。

アキアカネは日本特産種とされ、その生活史や生態は日本列島の中で独自の進化を遂げてきたと考えられている。もしそうであれば、アキアカネの生活史と深く結びついて現出する「赤とんぼが秋に群れ飛ぶ風景」は日本独自のものであろう。そして、同じく中国文化の影響を受けてきたとしても、少なくともトンボについて日本と韓国ではかなり異なった見方を成立させている可能性があることになる。韓国にはアキアカネの祖先種であるタイリクアキアカネが分布する。この祖先種はどのような生態を持っており、人々にどのような影響を与えているのだろうか。

アキアカネと韓国のタイリクアキアカネのDNAや形態による分類学的関係については、現在まだ分析中であり結論は得られていない。断続的な短い滞在でその生活史を明らかにするには限界があるが、いくらか印象を交えていえば、高地への長距離移動は別として日本のアキアカネとよく似た生活史を送っている。実際、韓国ではアカトンボ（韓国では唐辛子トンボと呼ぶ）は秋になって出現すると日本と同様の理解がされていた。生物学的にみた両種の関係はともかく、文化的には同一種といえる。トンボに対する見方は両国でよく似ているが[11, 12]、おそらくこの2種のアカトンボがそれぞれ仲立ちとなったのであろう。ただ、日本におけるような「特別な虫」との見方は韓国にはなく、トンボ採取に対する禁忌伝承も今のところ見出してない。この違いがどうして

生じたのかは今後の課題である。

3.3 日本人の伝統的自然観の成立と大陸文化の影響

平安時代の「蜻蛉」の実体については古くから問題とされ、「陽炎」や「遊糸」との関連も含めて、これまでも多くの議論が重ねられている（たとえば[4]）。今回もこの混乱の解明を目的の一つとしていたが、蜻蛉の実体がカゲロウかトンボかという詮索は、現代の生物分類学をもとにしての疑問であり、当時の人にとってカゲロウもトンボも同じ仲間の虫として認識されていたのではないかというのが結論である。「fly」が翅のある飛ぶ虫の全てにも適用されるように、「蜻蛉」には単に羽の透明な虫というぐらいの意味しかなかったとも考えられるのである。実際、今回行ったアンケートにおいてカゲロウの写真を呈示し、トンボの仲間と思うかどうかを尋ねたところ、56%の人が違うと答えたものの、5%の人がそうだと答え、残り39%の人は分からないと答えている。現代においてもこうであるから、平安時代の人々にとっては推して知るべしである。

ただ、「蜻蛉」の実体はともかく、その「蜻蛉」のもつ象徴性が「豊穰」から「はかなさ」に変化したこと、読みが「カゲロフ」になったことはやはり重大な問題である。なぜならそこに当時の自然観に対する大陸文化の影響を見ることができるからである。この点に関連して「花鳥風月」に代表される日本人の伝統的自然観は、実は古代の律令体制確立期に中国の文化の模倣・学習によって成立したとの見方がある[5]。この見方を援用すれば、手本とした中国側の教科書に蜻蛉がないため類似した蜉蝣を当て、象徴性もそれに伴って変化したとの説明が可能である。実際、当時の知識人が参考にしたという芸文類聚や詩経には朝生暮死の蜉蝣の記載はあるが、蜻蛉を示す言葉は見出せない。古代中国においてトンボに対する関心が低かったためであろう[10]。

多くの場合、大陸文化は朝鮮半島を経由して入ってきた。したがって、大陸文化の影響を考える場合は、朝鮮半島とりわけ百済や新羅文化におけるトンボの見方を理解する必要がある。日本人のトンボの見方は朝鮮半島の影響の可能性もあるからである。しかし残念ながら、古い資料が残されていないため、古代の朝鮮半島において中国文化がどのように受容され、それがまた日本にどのように伝わったかを推察する手がかりはない。11世紀から膨大な記録が残されている朝鮮王朝実録にはアリヤセミが数多く登場するのに比べて、トンボは簡単な記述がわずかに2件あったにすぎない[12]。

3.4 近現代日本人の自然観とその重層的構造の解明

近世以前の日本は、文化的鎖国状態の中でもかくも日本特有の文化、自然観が醸造されたといえる。しかし、近代以降は間断なく西洋文化の流入があり、その中で自然観も強く影響を受けながら変容を重ねてきたと思われる。しかし、一方で自然観は重層的なものであり、異なった成立基盤を持った自然観から成立している。中には容易に変容しない部分も存在する。近代以降の日本人が様々な自然観をどのように受け止め、自らの中に位置づけてきたかという問題は、現代の日本人の自然観を

探る上で非常に重要な問題である。

このような問題意識の中で、虫好き文化のルネッサンスとしてのファール昆虫記の影響[14]、アール・ヌーヴォーとの比較を中心とした日本人特有の美意識[16]、ゴケゴモ騒動に現れた現代日本人の自然観における問題点[24]が論じられた。また、現代人のトンボやホタル、クモなどに対するイメージや意識を探るために日本と韓国においてアンケート調査を行ったが、まだ分析途中である。ここでは、童謡「赤とんぼ」を現代人がどのように受け止めているかを分析することを通して、現代日本人の自然観の特性の一端を示す。

そもそもこのプロジェクトを始めたきっかけは、阪神大震災の折り身動きがとれない暗闇の中で、妻が歌う「赤とんぼ」が夫の生きる力の支えになったとのエピソードである。「赤とんぼ」の歌の何が生きる力を生み出すのか深く考えさせられ、この歌の背後に広がるもの、それこそが「風景」という言葉で私が理解したいと願っているものではないかという思いがあった。

「赤とんぼ」の歌のどういう点が日本人を惹きつけると思うか、という質問に対しほとんどの人（915名）が何らかの回答を寄せており、その点でもこの歌に対する関心の高さがうかがえた。同時に、その回答に極めて高い類似性も感じられた。一言で言ってしまえば、「郷愁」である。つまり、日本人なら誰もが思い浮かべることが出来る少年時代の故郷の風景、いわば（日本の）原風景をなつかしく思い出させ、人々にゆったりとした安らぎをこの歌は与えるのである。故郷を持たない都会人にも故郷のイメージを思い描かせる力がこの歌にはあるらしい。そこで日本人の原風景における普遍性という問題について考えてみる。

岩田慶治[3]は、原風景には遠景と近景そして感動という三つの欠かせない要素があるという。近景とは生活の場のまわりに生起する生きものと自然のドラマ。遠景とは空や海や山など背景となるものである。そして感動は、この近景と遠景をつなぎ止める接着剤である。原風景をこのような構図で見ると、三木露風の「赤とんぼ」はまさにこの構図そのものであることに気づく。近景としての竿の先に止まっている赤とんぼ、遠景としての夕焼け空。「赤とんぼ」は露風の原風景には違いないが、その露風の感動そのものは必ずしも表面にはっきりと出ているわけではない。むしろそうであるからこそ多くの人が感情移入できる余地が生まれる。露風が作った遠景と近景の舞台の上で、聞く人、歌う人がそれぞれの個人的な感動を演じることが出来るのである。この歌のすぐれた点は、その舞台装置として日本人であれば誰もが共通に持ちうる遠景と近景を用意したことである。夕焼けはもちろんのこと、赤とんぼもまたそうである。「豊穰のシンボル」となったアキアカネの普遍性が、実はこの歌を支え、多くの人に共感をもたらしていると考えられる。それはアキアカネを作り出した稲作風景の普遍性といっても良い。

しかし、そういったこの歌の本質的な仕掛けを理解した上で、いやむしろそれ故に、上笙一郎[6]は「赤とん

ば]を無気力な諦めの歌だと批判する。十五で姐やが嫁にやらされる封建制を指摘しながら、結局その目が赤とんぼに戻ってしまうのは、自然を生命あるものと信じ、自然と闘ってこなかった日本人の伝統的な自然観によるものだとして「批判」する。瓦礫の下の夫婦は「諦め」としてこの歌を歌い聞いたのか、闘うことだけが全てだろうか、闘う文化が自然破壊をもたらしてきたのではないかとの思いが湧き上がらぬではないが、この批判にどう答えていくかも今後の重要な課題だと指摘しておく。

3.5 カミ・ヒト・自然

ここで、カミ・ヒト・自然の三者の関係を考えてみる。西欧（おそらくキリスト教的）世界においてはまずカミが存在する。そしてカミは自然を創りヒトを造った。したがって、ヒトも自然も同じ論理、つまりカミの論理で存在する。ヨーロッパ中世に行われたという動物裁判[2]は、ヒトと動物（自然）を同じ論理のもとで裁いたという点で、まさにこのことを端的に表している。ヒトも自然も同じカミの論理で存在するのであれば、ヒトの論理で自然に立ち向かうことは至極当然のことであり、自然の保護や保全という考え方もその延長線上にある。いずれにしても、そこには論理がつかまとう。

一方、日本人の根底にあるアニミズム世界における三者の関係は曖昧である。ヒトはいかようにして生まれたのか？ 明明のことなのか取るに足りぬことなのか神話は語らない。ともあれ、ヒトはカミガミとともに森羅万象（自然）の中に渾然一体となって存在する。おまけにカミガミは論理的でも合理的でもなくむしろ気まぐれで、時々自然物に愚依して祟るといったうちの悪い存在である。そのカミガミを理解することなど出来るはずもなく、触らぬ神に祟りなしを貫くより他はない。そこに闘わぬ諦めの文化が生まれて来ることになる。そして荒ぶるカミガミを鎮めることに腐心した結果が自然との共生であったのである。もとよりそこに論理は存在しない。

4. 今後の課題と発展

トンボの見方には水田文化が深く関わっている。そういう点からいえば、中国側の資料は少なくとも古代において水田がほとんど存在しなかった黄河流域の資料であり、今後長江文明の解明が進めば違った見方も明らかになる可能性がある。朝鮮半島でも同様であり、古代日本と関係が深かった半島南部における口承伝承の解明が進めば、また新しい視点が生まれる可能性もある。欧米におけるトンボの見方は今回は問題にしなかったが、トンボを悪魔の使いと見るような見方がどうして生じたのか、あるいは虫嫌いとし虫好き文化の対比という形で比較してみることも面白いと思われる。さらにいえば、ネイティブアメリカンにはトンボを聖なる虫とする伝説も伝わっているようであり、そのような世界も視野に入れれば、稲作文化と狩猟文化という単純な対比では把握しきれない興味深い展開になる可能性もある。そして何よりも、論理の西欧的自然観と感性の東洋的自然観をどう融合させて新しい自然観を育むかが重要な課題である。

引用文献

- [1] Asahina, S. (1984) Some biological puzzles regarding aka-tombo, *Sympetrum frequens*, (Anisoptera: Libellulidae) of Japan. *Adv. Odonatol.* 2:1-11
 - [2] 池上俊一 (1990) 動物裁判 西欧中世・正義のコスモス. 講談社
 - [3] 岩田慶治 (1992) 日本人の原風景. 淡交社
 - [4] 錦三郎 (1972) 飛行蜘蛛. 丸の内出版
 - [5] 斎藤正二 (1978) 日本的自然観の研究. 八坂書房
 - [6] 上笹一郎 (1975) 童謡のふるさと. 理論社
 - [7] 上田哲行 (1988) アキアカネの生活史の多様性. 石川県農短大研究報告 (18) :98-110.
 - [8] 上田哲行 (1997) アキアカネにおける「虫」から「風景」への転換. 横山俊夫他 (編) 「安定社会の総合研究—ことがおこる・つづく／なかだちをめぐって—」 (京都ゼミナールハウス) pp. 67-86.
 - [9] 上田哲行 (1998) 水田のトンボ群集. 江崎保男・田中哲男 (編) 「水辺環境の保全」 (朝倉書店) pp. 93-110.
- 添付報告書
- [10] 朱耀沂 (2002) 中国大陸における民俗学的トンボのイメージ.
 - [11] 鄭光 (2002a) 韓国におけるトンボの象徴性.
 - [12] 鄭光 (2002b) 《朝鮮王朝実録》に載っている昆虫の名称とその象徴性—トンボとセミ, アリを中心に.
 - [13] 鄭光・申恩慶 (2002) 韓国人の自然観から見たトンボとその象徴—トンボに関する設問調査を通じた分析.
 - [14] 遠藤彰 (2002a) 「ファーブル・昆虫記」の伝播圏: 翻訳と読者あるいは観察と言葉.
 - [15] 遠藤彰 (2002b) 江戸の虫たちをめぐる表現と言説: 「虫濱け文化」そして「虫のいない明治」.
 - [16] 古賀悦子 (2002) トンボに美をみる —日本人の美意識と自然観.
 - [17] 斎藤慎一郎 (2002a) トンボの方言から見えてくるもの.
 - [18] 斎藤慎一郎 (2002b) クモの方言から見えてくるもの.
 - [19] 沢辺京子・上田哲行・東和敬 (2002) アジア産ウスバキトンボの分子系統樹から見た発生源推定の試み.
 - [20] 上田哲行 (2002) トンボにおける採取禁忌伝承と生態学的考察.
 - [21] 東和敬・上田哲行 (2002) アカトンボ圏とウスバキトンボ圏 —アンケートからの推測.
 - [22] 横尾文子 (2002) 怨霊の自然観 —「鳥獣虫の供養塔」に寄せて.
 - [23] 吉田真 (2002a) クモ合戦を科学する.
 - [24] 吉田真 (2002b) ゴケグモ騒動からみた日本人の自然観.
- ### 5. 発表論文リスト
- 上田哲行 (2000) 雑誌『日本人』におけるトンボ. *Symnet* (8) :1
- 遊磨正秀ほか編 (2000) 「ホタル文献目録」全国ホタル研究会・水と文化研究会
- Higashi, K., C. E. Lee, H. Kayano & A. Kayano (2001) Korea strait delimiting distribution of distinct karyomorphs of *Crocothemis servilia* (Drury)(Anisoptera: Libellulidae). *Odonatologica* 30:265-270.
- 斎藤慎一郎 (2002) 蜘蛛 (ものと人間の文化史シリーズ) 法政大学出版局. 2002. 5月刊行予定
- 横尾文子 (2002) 佐賀の「虫供養塔」. 佐賀女子短期大学平成13年度生涯学習センター事業紹介 pp. 5-6.